

花伝書別紙口伝

九 一代一人の相伝

一、此別紙の口伝、当芸に
於^をいて、家の大事、一代一人
の相伝なり。仮令^{たとへ}一子たり
と云^いふとも、不器量^{ふきりやう}の者^{もの}に
は伝^{つた}ふべからず。「家々にあ
らず、続^{つづ}くを以^もて家^{いへ}とす。
人々にあらず、知^しるを以^もて

〔口訳〕

此の別紙の口伝は、我が能芸に於ては、家の大事であり、一代一人の相伝のものである。たとひ我子であつても不器量の者には伝へてはならない。「家々にあらず嗣ぐを以て家とす、人々にあらず知るを以て人とす」といふことがある。この口伝こそ、万徳了達の妙花を究める所のものであらう。

人とす」といふ。これ万人とす。徳了達の妙花を究むる所なるべし。

一、此別紙条々、先年弟四郎相伝すると云へども、元次芸能感人たるに依て、是を又伝所也。秘伝之。

此の別紙口伝の条々は、先年、弟四郎に相伝したものであるが、元次も亦芸能にすぐれた者であるによつてこれを相伝するのである。秘伝として大切にすべきものである。

応永廿五年六月一日 世

花押

〔評〕 この条は、別紙口伝の奥書であり、又同時に、この口伝の相伝についての注意をあたへたものである。「家の大事・一代一人の相伝」といふ語は、如何にこの口伝が大切に考へられて居たかを物語る。この一篇こそは、花伝書に睛を点ずるものであり、生命を吹き込むものである。このことは、現在我々がよんで見ても痛切に感ぜられる所であり、花伝

書七篇中最も神彩陸離たるものである。かやうな大切な秘伝であるから、「たとひ一子たりとも不器量のものには伝ふべからず」といふ訓戒が生れたものである。論語に、「ともに言ふべからずして、ともに言へば、言を失ふ」といひ、易に「其の人にあらずして其の書を伝ふるは、天のにくむ所なり」といふと同じき立場である。又、「家家にあらず、つぐを以て家とす。人人にあらず、知るを以て人とす」といふのも、真に家芸を愛し家芸を尊び、真にこれを伝へんことを熱望するの誠心からの言葉と見るべきであらう。家系よりも子よりも芸が大切だと信じ切つて、はじめてかく言ひ得られるからである。